

学徒動員

浅田 幸子

昭和二十年八月十五日。その日は日本国民のだれもが泣いて口惜しかった、あの終戦の日だ。私にとっても、年号は違ってもこの日は奇しくも誕生日だった。大阪府の職員だった私は十八歳。

天皇陛下の物静かで、かつ悲痛なあの声が皆の胸を締めつけるように響きわたった。皆、大声で泣き伏した。勝つ見込みのないアメリカのような大国と戦って、ついに負けた日本。それまでにどれだけ多くの人たちが死んでいったことか。無意味な死。戦争のいかに恐ろしい、この世の地獄を見せられたような、あんな

な思いは二度としたくない。

十六歳で大東亜戦争勃発（ぼっぱつ）。当時、四年制の女学生だった私は、大阪市此花区桜島の軍需工場の住友伸銅所で女子挺身隊員として、三年余り毎日働き続けた。男性が扱う六尺（約一・八メートル）旋盤と取り組み、顔も手も油にまみれて飛行機の部品、インゴットをつくる仕事をしていた。

本土も日ごとに空襲が激しくなり、仕事の最中でも防空頭巾（ずきん）をかぶり、急いで北港へと逃げた。防空壕の中で震えながらB29の爆音が遠ざかるのを待って外へ出た

時、トラックに乗せられた真つ黒な丸太のように焼けただれた人々。性別も分からない人たちが、こちらを見て「熱い、助けて！」と弱々しい声で泣き叫んでいた。

思わず涙があふれ、私は手を合わせて拝んでいた。気の毒な人たちが助かることはなかっただろう。トラックには何も敷いてなく、ガタゴトと無情な音をたてながら、走り去った。まさに、この世に見る地獄図だ。

空襲が終わって家路についた時、もう既に街中は国道を挟んで火の海。広い焼け野原の中に幽霊のようにポロ布を引きずって、こちらに歩いて来る人々。私は、友だちと二人で肩を寄せ合って、怖さに震えながら歩いた。また、歩き続けた。

市電の路線に沿って四貫島、九条、玉川、梅新、都島、赤川……どこをど